

ジャンケンポン協定

佐木隆三 晶文社

ジャンケンポン協定

佐木隆三 晶文社

ジャンケンポン協定

一九六五年五月一日第一刷発行

定価 四八〇円

著者 佐木隆三

発行者 中村勝哉

発行所 株式会社 晶文社

東京都千代田区外神田二丁目一の四

電話(二五三)二〇九三

振替 東京六二七九九

印刷 第一印刷株式会社

製本 橋本製本所

装幀 平野甲賀

©一九六五八検印廃止√落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

ジャンケンポン協定

三

同室三人

五

地上

九

指

一三

票読み

一八

コレラ

二四

あとがき

二七

ジャンケンポン協定

1

工場事務所前に行列が出来ているのを見たとき、また予防接種かなにかやっているのだろうと早合点して、彼は工場の裏側を通して更衣室に入ることにした。どういうわけか注射と聞いただけでふるえあがる性分で、前年のコレラ騒動のとき同僚は先を争ってワクチンの接種を受けたものだが、彼はその混乱をいいことにおせっかいな衛生管理者をゴマ化したものである。それに、今朝の彼は十四分間の遅刻でクサっていることでもあるし、あの衛生管理者の「健康は摂生から 生産は健康から」との口癖にでも接しようものなら、せっかく宿酔でふらつく足を運んで出勤したもののすぐ引返したくなるに違いないので、とにかく行列に加わることを避けて線路伝いに裏へ回った。

「ダメだよ、逃げ出しては」

その一帯に積みかさねてある鋼材の陰から、顔面の半分以上をマスクで覆った男が現れて彼の前に立ちはだかった。

「バレたか」彼は頭を掻いてみせた。「今日は、なんの注射ですか」

「注射？」

「そうでしょ、ダメされませんよ」

「違うよ。ジャンケンポンだよ」

男は一步踏みだして、ハンチングをあみだにずらせた。ガーゼ生地が大きな波を打ったところを見ると、笑った様子である。

「ジャンケンポンを、いきなり今日やるなんて」歯ぎしりするつもりだったが、歯の根がふるえて合わない。「あんた、守衛か」

「いや。その守衛連中も、いま頃はジャンケンポンに眼の色をかえている頃だろう」

「ちきしょう、予告もなしにやるなんて。あんた、守衛じゃないのならそこをどいてくれよ」

「ダメだね。命令だから」

男はレインコートのポケットから、いきなり手錠をとり出してみせた。

「冗談じゃない。ここは天下の製鉄所の敷地内だぜ。警察に大きなツラをされることはない筈だ」語調が荒っぽくなったが、やむをえない。相手が職制や守衛だとこの種のハッターは逆効果になってしまうが、構内に居る限り社員以外の人間には高姿勢で臨むのがもっとも効果的である。

「製鉄治外法権も今度ばかりは例外だね」手錠をこすり合せながら、刑事とおぼしき中年男は肩をそびやかした。「妨害排除の仮処分申請が、会社と労働組合双方から出されている」

「暴動が起るにきまっているさ。そんな手錠なんて、ひとたまりもないぞ」

「だいじょうぶだよ、県下の警官が大動員されている」

「五万だぜ、こっちは。主催者側発表でも警察側発表でも一致する、真正正銘の人数だからね」

「よく計算してみな。五万人のうち、ジャンケンポンに勝つのは二万五千人だぜ。負けてアタマにくる二万五千人に、もし不穩の動きあらば勝った二万五千人が企業緊急防衛隊として鎮圧にあたる、ちゃんと組合のほうから申入れがあっているというじゃないか」

「くそったれめ……」

「ま、そう昂奮しなさんな。なにも、負けるときまったわけでもない」

刑事は軽く彼の両肩に手をかけ、くるりと半回転させ、今度はトンと背中を突いた。いまさらシタバタしてもはじまらぬと思ったので、彼は行列の方へ行くことにきめ、それも自らの意志ではなく刑事に背中を突かれてやむなくだぞと弁解しながら枕木の上を跳んだが、背後から追ってきた声の意味を確認した途端に急ブレーキをかけた。

「いいものがあるよ。押収品だが、五千円程度だ」

2

すっかり静かになってしまった列の最後尾についていた彼に、ひどく愛想のいい娘がやってきて氏名を確認した。そして、1124とナンバーリングで印した小さな伝票を渡すと、右手を軽く挙げることを命じた。

「あなたの名前は？」

「いま言ったじゃないか」

彼は唇を尖らせた。新米め、と怒鳴ろうかと思ったが、娘のセーターの胸にミッシェンスクール大
学部二年との標章がついているのに気づき、アルバイトならやむをえまい、と従うことにした。

「落着いてください。執行前の宣誓です」

「宣誓？」

「とにかく、わたしの言うとおりに続ければいいのです」

娘は大きなゼスチャアで彼をなだめ、曇った空をいったん見上げたあと眼を閉じそのまま気どった
調子で問いかける。

「あなたの名前は？」

「鉄野哲次」

「あなたの職場は？」

「ストリップミル工場メッキ検査班」

「あなたの年齢は？」

「二十一歳と五ヵ月」

「ジャンケンポン協定の精神にのっとり正々堂々と戦いますか？」

「ジャンケンポン協定の精神にのっとり正々堂々と戦います」

「よろしい。やがて執行です」

娘はにこやかに言って、忙しそうに彼の前から立去った。

「ちえっ、仰々しい……」

彼は舌打ちした。しかし、その実こみあげてくる不安をおさえきれない。それに、あれほどざわついていた列の全体が沈黙したままなのが、いっそう不気味なのだ。

「オレが、1123番だよ」

前の男が、彼に向かって頭を下げた。

「ボクは、1124番です」

初めて見る初老の男に、彼もそんな自己紹介をした。そして、せっかくふりむいてくれたのだからと、さらになにか話しかけようとした。こんな場合の話相手は、病院の待合室でもそうだが、やはり年長者に限る。

「よろしく頼むよ」

「こちらこそ」

彼は安堵した。どうやら相手も話好きな性分のようなのだ。

「正々堂々とやろう」

「ええ。正々堂々と」

「宣誓もしたことだし……しかし、あんたのような若い人と組み合わせられると、なんだか気が滅入るね」

「じゃあ、ボクはあんたと？」

「そうだよ、奇数番号と偶数番号でジャンケンポンをやるのさ」

「……」つい半歩ほど後ずさりしてしまい、彼はそこで呼吸を整えた。この種の緊張感があったのはいつだったか、とどうしても記憶の糸を手繰り寄せる必要を覚えたので、やっと思い出してみると、小学校の運動会での徒歩競争のスタートライン上で同じグループにさせられた同級生達の顔ぶれをせわしく確認するときの昂奮である。「やりにくいなあ。あの手この手を心得えた、海千山千の年配者との勝負となると」

「そうかな。マージャンやパチンコだと、年期的入れ具合でずいぶん勝負強くなれるけど、ジャンケンポンはそうもいくまいから。ところで、あんた、初めて見る顔だが」

「そうですね。裏番かなにかだったんでしょう」

彼が列の最後尾だから、ストリップミル工場のジャンケンポン協定参加者は一二四人ということになるのだろうが、その一人一人を点検して歩いたところで彼に記憶のある顔といえばわずかなものだろう。操業短縮らしい三交代作業でフル生産の体制から全員常昼勤務になったものの、鉄骨のサビ落しや工場周辺の草むしりなど活気のない仕事をさせられてきた過程では、互いに顔を合せても素早く視線を伏せてしまう恥じらいに似た気持があり、記憶するどころではない。

「メッキ検査班だってね」

「ええ。電気ブリキラインの」

「オレは、亜鉛鉄板ラインの工程担当作業長だ」

「作業長さん……」

「早目に非組合員にする手続きをしていれば、ジャンケンボン協定の例外要員になれたのだが。しかし、いずれにしても会社再建のためだ、製鉄マン本来の無欲の精神で勝負に臨むさ」兵隊の位でいうと将校一步手前の曹長ということになる工員の元締の作業長として、相手はそこで大きく胸を張った。「お前さん、入社はいつだね」

「三年前の四月です」

「勤続三年か。退職金はいくらだろう」

「ちえっ、縁起でもない」

「だって、オレかあんだか、どっちかは引退確実じゃないか」

「そうすると、作業長さんは」

「勤続三十七年ちょうどさ。二百十四万円と出たよ」

「……」

「試算だよ。どうだね、あんたもやってみたら。IBM社の出張員に、基本給・勤続年数・職分を記入して百円添えれば、退職金の額はすぐ出るさ」

「でも、三年くらいじゃあ」

「三万五千円くらいかな」

「残酷だよ、それっぽっちゃ」

「でも、退職金と一緒に未払いのままになっている昨年末の賞与も支給されるよ」

「しかし試算だけでは、ダメですよ」

「とんでもない、ジャンケンポンに負ければ、即時現金払いだよ」

「マユツバですね、あれほどゼニが無いと言っているのに。退職金一人平均が百万円とすると、二万五千人で二百五十億にもなる」

「ところが、流石は世界労働運動史でも初の紳士協定といわれるジャンケンポン協定だけのことはある。感激した世界銀行の総裁が、ボンとドルで一億ほど出したそう。海外でも、今度のジャンケンポン協定は大評判だというね。あんたも、新聞を読んでは知ってるだろうが」

「しかし、去るも地獄、残るも地獄とも言いますよ」

「アカが撒いたピラのことだな。あんな文句、炭鉱争議で手垢がついてるよ。基幹産業である製鉄所に関する限り、残るも地獄ってことがあるかい」

「でもねえ、生産性二倍という案を見ただけで、ぞっとします」

「ムシのいいことを言うもんじゃないよ。会社がつぶれるかどうかの瀬戸際だ、残れたものが全力を尽すのは当然じゃないか」

「それはそうでしょうけど」

彼は、口ごもった。ジャンケンポン協定実施後の労働生産性なるものを思うと、誇張ではなしにぞっとするのだが、いまそのことにこだわると、じゃあジャンケンポンに負けろよ、と言われそうで、それきり黙りこんだ。

——皆さん、間もなくジャンケンポン協定にもとづくジャンケンポンが開始されます。そのルールについては、すでに会社発行のパンフレットおよび組合機関紙でも詳しく報じておりますので多くを

語りませんが、繰返し申しあげておきたいのは、すでに宣誓されたとおり、正々堂々とジャンケンポンに臨んでいただきたいということであります。

「支部長の声だな」

いきなり頭上から降ってきた声に、作業長は眼をむいた。

「あの声は、支部長さんですか」

「あの野郎、うまい汁を吸いやがって。職制と同じように、組合役員も例外要員になってジャンケンポンをしなくてもいいものだから、のんびり演説していやがる」

「全くですよ、ダラ幹もいとこだ」彼は支部長の名前さえ知らないのだが、青年部長の口癖を思い出し、作業長に調子を合せておいた。

「なにも、そういう意味では……」作業長はひどく慌てて、周囲を気にした。「例外要員になるのは当然さ、ジャンケンポンの勝者に左派が多くなりでもすればたいへんだからね。いまの組合幹部がジャンケンポンに負けたら、会社はやりづらくなるさ」

——光榮あるジャンケンポン協定バンザイ。会社バンザイ。組合バンザイ。では、開始致します。

3

ジャンケンポンは、午前九時から始められた。彼の計算によれば、一組の勝負に二十秒要するとみて、五六二組だから約三時間半かかる見込みである。勝負そのものは、事務所二階の課長室でおこな

われるが、会社側代表である課長と組合側代表である支部長の立会があるので、一組ずつしか消化出来ない。

「練習しようか、度胸試しだ」1123番の作業長が、咽喉を鳴らしてツバをのみこみながら言った。

「だって……」

彼は、尻込みした。ジャンケンポンは、もちろん課長室でおこなわれるものしか正規のものとみなされないが、いま列のあちこちで小さな歓声が上っているのは、オーブン戦だと断ったジャンケンポンがされているからだ。正規の勝負が進むにつれて、列は少しずつ前に移動しているわけだが、みなたまりかねてそんなことをしている。彼も度胸試しはしたいが、やはり負けした場合不吉な前兆ではないか、と考えられる。

「ちょっと、トイレに。そのあとで」

「待った」作業長の眼が光った。「あんた、持っているね。そうだろ、ジャンケンポン必勝法を」

「知りませんよ、そんなもの」

「隠したってダメだ、わかっている」悲痛な声で作業長が言う。「いたずらに人心をまどわせる、という理由で警察は片っぱしから押収しているという噂だが……」

「知りませんよ」しかし、彼はオーバーの内ポケットにその小冊子を持っている。大きなマスクをかけた刑事から、言い値五千円をまけさせて所持金千七百円全部をはたいて買ったのである。「発禁